

安城下宿80周年 幻の伝記と 南吉の願い

丈山小学校 六年 岩瀬 実莉

1 研究のきっかけ

5月26日に新美南吉が下宿していた大見家で「新美南吉好きすぎる会」の会長の石川恵深さんが新美南吉のもよおしをする事を私がふだんお世話になっているカメラマンの浅岡由次さんから教えてもらい、初めて南吉の下宿先へ行きました。その時に南吉が大見家の下宿して今年で80年ということを知りました。大見家の下宿先で南吉が書いた「百姓家」という大見家の事をモチーフにして詩を朗読した時、南吉が見ていた景色の中で作品の良さがきわ立ち、とてもすてきだったので、南吉が書いた詩に興味を持ち、今年も新美南吉について調べようと思いました。



下宿先で南吉のもよおしの時の写真



大見家でやっていた畑と大見神かさん(大見孝かよ)が勉強するところ(農家の建物、南吉の下宿していたところ)



下宿先でみんなが百姓家を読んでるところ



詩や童話などが書かれた舞台上で読むと、その詩や童話が身近に感じられるし、いきいきとしているように感じました。

2 準備方法

南吉に関係するもよおしに行ったり、そこから出てきた疑問点をいろいろな人に聞いたりしました。

3 新美南吉記念館を訪れて7/23(火)

新美南吉記念館では、7月13日～10月27日まで、常設展示の他にも「日本丁髷と南吉の暮らし」という展示をしていて、それを見に行きました。そして私は南吉が都築弥厚のことを深く調べていたけれど、体調が悪くなってしまう、書くことができなかったことを、昨年の研究の中で知っていました。とはいっても、そのことが南吉にと、てどれだけ無念なことだったかが伝わってきたのです。



「明治用水の開発」から始まり、私達が4年生の時に学んだ水不足に悩まされていたころの中城、都築亦厚による用水計画とその消滅、彼の死後50年後の再開発と実現についてを、次の「日本丁種林への成長」では、戦後の恐慌の中、産業組合を中心に農村を近代化していたことから、農業先進地域と知られ、大正末期～昭和前期にかけて日本の丁種林と呼ばれるようになったことが書いてあります。

「農業と街」では、米、麦だけでなく、養鶏、養豚などの畜産や、養蚕、その他トマトやナシ、スイカなどの野菜や果実の栽培が行われました。次の「南吉が見た日本丁種林」では、一番その時代でにぎやかな日本の丁種林で、南吉はその部分をよく調べていたのではないかと思います。そして、「南吉と牛」では、「百牛物語」と題して百編の牛の話を書こうとしました。でも結果、3作で終わってしまっ、たことが書いてあります。ここで分かるのは、牛はいつも南吉の身近なところにいたということでした。百牛物語は昭和15年5月に書かれている作品で、中城に来て、一番楽しくて、体調が良い時に書かれた作品で、南吉が中城の風景とそこでの人々の暮らしをとっても温かい目で見ていたことを感じます。

「中城高等女学校の生活」では、南吉が勤めた中城高等女学校は、農業の授業があるという、日本丁種らしいカリキュラムを持った学校でした。南吉は、約5年の教師生活の中で、赴任と同時に受け持った19回生については入学から卒業まで4年間担任を務めています。昭和13年(1938年)4月に赴任し、英語の教師として採用されながら、進んで担当した国語では、生徒の詩や作文をていねいに指導しました。そして時には、生徒たちを校舎の外に連れ出し、作品を作らせました。

「戦時色が強まるなかで」では、農村では、働き手を兵員にとられ、梨畑などが減って風景も変わっていききました。昭和14年(1939年)2月、南吉はクラスで詩集「雪とひばり」を発行し、その後、9月までに計6冊の詩集を発行しました。しかし、物資の減少により詩集の発行を中断することになりました。作文の時間に、兵士への手紙を書かせたり、戦争で男手をとられた農家を手伝いに生徒を連れていたりしました。

「中城に下宿するまで」では、南吉は、赴任当初、羊田から中城まで通勤していましたが、戦争の影響で、人的、物的資源を統制するため、国家総動員法が公布され、職員は学校の付近に居住するよういわれたので、下宿を選び、昭和14年(1939年)4月に新田の大見家に下宿しています。



大見家の「宿」「工房」では大見家は安城の新田を苦勞して切りひらいてきた古い家系です。南吉の「百姓家」という詩にもあるように、大見坂四郎夫妻と、夫が単身赴任で、たまにしか帰って来ない娘夫婦、孫の男の子が2人の計6人と犬1匹が暮らしている農家でした。南吉が下宿した当初は不眠に悩みしばしば、月夜の晩などに、周辺を散歩して、どんな作品を書こうかと、考えました。

自筆原稿の最後に「五、六とあり、この日記に詩を添えた。詩は写しとて思惟所を述べた。



この作品は制作年月日のかかっている詩作の中で最も、とも死にたい、暗黒の作品と云えることが、故郷 新築の宿に書かれていました。

昭和7年(1932年)10月5日の作品



最近の作品は、昭和14年(1939年)5月の東京時代の友人、江口榛一の世話で満州の「ハルビン日日新聞」に、作品を寄せるようになり、「最後の湖弓弾き」「久助君の話」「花を埋める」などの作品を次々と発表しました。南吉は、これらの作品を夜おそく帰ってから、という間に書き上げ生徒に清書をお願いしては送っていました。



下宿を始めて2ヶ月後の詩「宿」では、不眠の辛さもあってか下宿を「夜と苦しみの栖」と表現していきす。それから7ヶ月後の詩「工房」では、「ああ、私に来るのはここだ。」と下宿への愛着を感じさせる作品を創っています。日記からも、南吉が大見家の人々と、とても仲よく暮らし、温かな家庭の様子を静かに感じとっていたことが分かります。また、南吉は、近所の子どもとも交流をしていました。

作家として夢をかなえた安城では下宿を初めた昭和14年(1939年)5月東京時代の友人、江口榛一の世話で満州の「ハルビン日日新聞」に、作品を寄せるようになり、「最後の湖弓弾き」「久助君の話」「花を埋める」などの作品を次々と発表しました。南吉は、これらの作品を夜おそく帰ってから、という間に書き上げ生徒に清書をお願いしては送っていました。

それだけかけて、全国的に有名な雑誌「婦世界」昭和15年(1940年)12月号に「銭」「新児童文化」にも「川」(同年12月発行)が掲載されました。同年12月26日の日記に「それだけの成功にこの頃の僕は何だ、と書いています。

1月から「良寛物語手紙と鉢の子」を書き始めわずか3ヶ月で完成しました。無理をこらしたので南吉は体調をくずし、一時は死を覚悟しますが、1年後の昭和17年(1942年)の前半には、休む間もなく数多くの作品を書き上げました。そして、同年、10月初めの童話集「おじいさんのランプ」を出版しています。

都築弥厚の伝記では、昭和16年(1941年)10月に学習社から「良寛物語手紙と鉢の子」を出版し、好評だ。た南吉は、同社から2作目を依頼され、安城の偉人、都築弥厚を題材に選がました。



私生活の生活者の人

南吉が弥厚に興味を持つ機会が日常生活にあ。たことは確かだ。生徒たちと、弥厚を祀る明治川神社を何度も遠足で訪れています。南吉は自分が本来、百姓の子であることを深く自覚していたし、ふるさと知多半島も、多くのため池を造り、水に苦勞しながら生活してきた土地でした。

※新美南吉記念館で同じ船の伊藤三郎の人物に付いた。

さらに、南吉が教えた月回生には、伊豫田紋子という明治用水開削の功労者の子孫がいました。遠足で、南吉はその生徒と郡築弥厚の話をしていたそうです。

「弥厚を探して」では、南吉は伝記のために資料を集めて読むだけではなく、地元で古老である豊業図書館館長の岡田庄太郎と大乗寺住職の山口英信から聞き取りを行い、「古宇城聞書」としてまとめた。

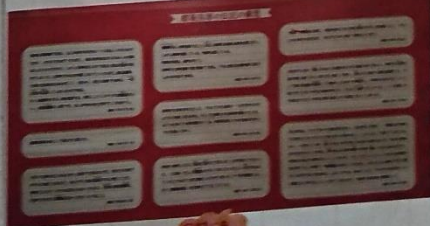


上の写真「〜新美南吉生誕百年記念事業特別展〜南吉が安城にいた頃(安城市歴史博物館)より

「安城の新美南吉(安城市教育委員会)より新美南吉記念館のカフェで見つけました。

どいう資料なのか分からず、7月31日に歴史博物館に質問をしたのですが、歴史博物館の片岡晃先生が質問に

親切に答えてくれました。その時に持ってきたのがこの現代版の「三河国名所図絵」です。図書館で借りて見てみましたが、南吉が書き込んだページの様な所はありませんでした。この本には、石橋など自然が刻んだすばらしい景色を紹介されています。この資料を見て、南吉は弥厚の伝記を書くために、昔の安城の土地について調べていたのではないかと思います。そして、南吉は伝記の構想を度々練っていました。



弥厚が身をもって示した人のためなる生き方。それは「牛をつないだ椿の木」や「おじいさんのラップ」で描かれた南吉晩年の重要なテーマでした。南吉は弥厚の死ぬ前の言葉として「私は死ぬ、けれど私の仕事は死なない。私の仕事は必ず生き返ってくる。即ち私の仕事を誰かが受け継いでほしいのだ。何故なら私の仕事は正しいことなのだ。」というメモが残されています。そこには、自らの作品が読み継がれてほしいという南吉の願いが現れています。

弥厚の伝記に

「伝記はどうか、たのか」昭和17年(1942年)8月南吉は弥厚の伝記に着手するつもりで、長野県人執筆旅行に出かけますが、宿探しに苦勞し、執筆が思うように進まないなか最終的には群馬県の万座温泉に宿泊しました。南吉は巽聖歌と女学校の教え子に手紙や葉書を送っており、現在南吉が確かに弥厚の伝記に取り組んだことが分かっているのは、この記録が最後です。
都築弥厚の伝記は完成しませんでした。その背景としては、良寛とは違い、地方の偉人である都築弥厚は、小説にするだけの資料が少なかつたこと、また南吉に十分調査を行い、書き上げる体力がなかつたことなどが考えられます。

文学がなか、たら心の余裕がなくなり、走、てい、てルールにとびこんでいるかも知れない。文学でも1本のカンフル注射くらいのききめはあるのだ。生命にと、て。(昭和17年(1942年)1月14日)

と日記に記した南吉は、弥厚と同じくまさに仕事そのものが南吉にのりうつ、て、仕事のために生きているという状態だ。たのでしょう。病に侵されながらも昭和17年(1942年)前半には多くの作品を執筆しました。昭和18年(1943年)1月、喉頭結核によりいよいよ宇城高等女学校を休職せざるを得なかつた。南吉は宇城を去り、半田で療養生活にはいります。それでも作品を書き続けていきましたが、1月半ばに取り組んだ「天狗」を最後に、その文学がままたらなくなつた状況になりました。

南吉が病を押して書いた作品第2童話集「年をつないだ椿の木」第3童話集「花のき村の盗人たち」として出版されたのは、昭和18年(1943年)9月のことでした。南吉は出版を待たず、早くも届けることなかつた。昭和18年3月22日の朝亡くなつていきます。

<この催しから>

下宿先での南吉のことや、南吉の書いた詩や南吉の日記を交えながら展示してあり、昨年の研究で学ばなかつたことを知り、感じることもできました。そして、いろいろな疑問が浮かびました。

- 宇城高等女学校の先生として、英語の先生や作文指導をしていたにも関わらず、たくさん作品を書いているが、詩作品などから感じられるゆ、たりのした心豊かな生活はできたのか。
- 伊豫田欣子さんは明治用水開削者の子孫だと書いてある。たけれど誰の子孫でどんな関係なのか。
- 参河國名所圖繪(三河國名所圖繪)とは何か。

4 疑問について質問する

- ① まず、7月30日にアソフォーで行われた「新美南吉生誕祭」の石川恵深さんの朗読会に出かけました。

その日の朗読会では詩「五月の太陽と」「ひよこ」下宿での日記とエピソードなどを聞かせてもらいました。その中で昭和14年(1939年)4月17日、南吉が下宿に来たばかりの時の日記を紹介してもらいました。

この日記は、新美南吉記念館の催しでも紹介され私がすてきだなと思、た日記でした。ふつうの人は、その日楽しかった事やがんばった事を簡単に書くけれど、南吉はそれに加え、その日自分がすてきだと思、た事のありのままを、作品と同じようにくわしく書き残しています。

この日記の「うつくしい歌を詩にしたもの」があると教えてくださり、朗読してくださいました。とても感動したので、後で聞いてみたら、この詩が、っている本を紹介してくださいました。

私は、恵深さんの朗読会に参加する度、南吉の詩の世界に興味を持つようになりました。

南吉の日記には、出来事を彼の感性で受けとめ、その中で確信した事が書いてありますが、それもまた作品の中で生かされていると感じます。

恵深さんの朗読会に参加した時、参加者の皆さんと、一緒に詩の朗読をしました。一つのことを何となく、一緒に分かちあえた様な感覚があり、歌にも文学にもそういう力があるのかなと思いました。



私の質問については「日記に書かれている事が本当の事だと思、うから、日記を讀んで考えてみると想像がふくらむかもしれないよ」と話してくださいました。また、新美南吉記念館の学芸員さんの名前を教えてください、「とてもよく知、てるから、聞いてみてごらん」と言ってくださいました。

恵深さんはどうして南吉の朗読会などの活動をしているのですかと質問してみたら、南吉の作品を讀んで「感性がすごいな」と思、たからだと教えてくれました。そして、南吉がハニサムだからというこ、とも活動に「繋が、る」そうです。



私と同じこの本を見て南吉の顔にな、りました。

私は、恵深さんの活動が、南吉の活動だと思、います。恵深さんの優、しさから人のための活動だと、いつかよく分、かります。



②次に、歴史博物館の館長片岡晃先生に質問をしました。質問をして
もいいか電話で聞いて行ってみると、たくさんの本を持ってきて、
とても親切に質問に答えてくださいました。

- 安城高等女学校の先生として英語の先生や作文指導
をしていたにも関わらず、たくさん作品も書いてい
るが詩作品などから感じられるゆたかりとした心豊かな生活はできたのか。



この質問をして、片岡先生は、毎日が楽しすぎて忙しさ
をわすれていたのでは、と言ったり、南吉がいろいろな人と関
わっていて、その全てを作品の材料にしてしまうほど日々を楽
しんでいるのではないかと先生の考えを話してくださいました。

恵深さんに日記を読んでみようと言われて見つけた日記があ
ります。

近頃物をたのしむ心持ちがよくわかって来た。今まで僕の楽し
みは文学だけ、ねてもさめても文学のこと詩のことを考えてい
たが、近頃そうではなくなつた。何にでも楽しみがあることがわ
かつた。仲略またそれが一層文学的だと思ふのである。
(昭和十四年一月十八日)

この日記は、安城で書かれたものですが、まだ大見家には下宿し
ていません。ですが、この日記から片岡先生が言っていることは、
そうなのだろうと想像しました。

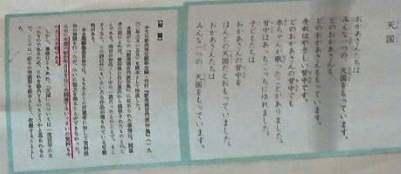
- 朗読詩集、安城紡がれた南吉の詩に出ている詩しか安城で詩
を作っていないのか。

その他にもたくさん詩があることを片岡先生が教えてくださいました。

片岡先生は昔、榎町小学校に勤務されていて、その頃に、
学校に誇りを持つために南吉のことを学び合い、その
頃の話がたくさんしてくださり、詩集や資料を私にくださりま
した。その一つがこの「南吉のうた」です。この詩集の他に
も恵深さんに教えてもらつた詩集なども読みました。
『校定新美南吉全集第8巻』と『デテムシ新美南吉詩歌集』
には詩の書かれた日付などが書かれています。

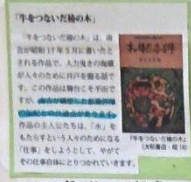
片岡先生は「天国」という詩が好きだと言っていました。
が書かれた時の日付が分からないと言っていました。

調べると、全集の中に解題がありま
す。制作年月日は不明の様
ですが、この作品が見つかつてよか
つたと思うほど、優しさにあふれ
た素敵な詩だと思ひました。



資料採取に行かれた片岡先生は新美南吉に親しい会の事務であり、歴史博物館でもお仕事をされている都築さんを連れてきてくださいました。カメラマンの浅岡由次さんとの親交があるとのこと、話に花が咲き、閉館まぎわに片岡先生といっしょに楽しい時間をすごしました。都築さんが明治川神社の連絡先を教えてください、何度も何度も電話をかけますが、おたく何も聞けず、新美南吉記念館に問い合わせたら疑問は解決しました。

5 終わりに <牛をつないだ椿の木について>



私はこのお話しから、真。ずな信念だけでなく、自分より他人を大切に思う心こそが周りの人の心を動かし、世界を変えていくという事を教わったと思います。南吉は子どもで言葉も童話で、弥厚という人物と、そこから学ぶことを残してくれたことに感謝したいです。南吉が大見家に下宿して80年の今年、明治用水が通水して、40年目と8月16日の新聞に書いてありました。この研究を通して、南吉と弥厚の「仕事」が繋がったように思います。



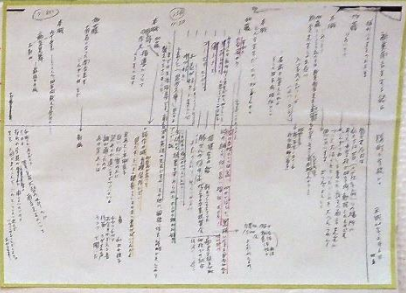
<大見さんについて>

自宅を公開するということは、とても大変なことだと思えます。きれいに掃除をしたり、手がかけられていると思います。南吉の作品をより生き生きと感じられる空間を人々と共有して、南吉の作品の良さを共感できると思えます。大見さんたちはすごいし、他の人のためになることをしていると思えました。



<日本丁林と南吉の作品について>

戦争の影響で職員は学校の付近に居住すべしという通達があった。大見家の下宿に来ていなければ今の南吉の作品はなかったと思います。南吉は安城に来たからこそ素晴らしい詩や童話を書くことができたと思えます。安城はそれだけすてきな場所であり、強く生きぬいてきた良い人が暮らしてきたのだと思います。南吉が必死に伝えようとした日本丁林の豊かな暮らしに感謝の気持ちと誇りを持ち、地域を大切に生きていきたいです。作品に残された南吉の願いは、安城の人々にこの事を伝えることでした。



上の資料は片岡先生が榎町小学校にいた時南吉の教え子の加藤千津子さんと本城良子さんから南吉のことを伝えに来校された時のもので、授業をするためのメモ書きを片岡先生が保管されていたものを見せて頂きました。私は千津子さんの資料を見て、南吉先生は時間が経ってもわすれられない程すてきたのだと、それを私に伝えたいのは良いことと思われ、私も南吉先生に会ってみたいかなと思うようになりました。

<参考文献>

- 生誕百年新美南吉 <新美南吉記念館>
- 新美南吉生誕百年記念事業特別展「南吉が安城にいた頃」 <安城市歴史博物館>
- 生誕100年記念新美南吉「ふぎの地」 <ふぎの地「ふぎの里」に於いて「ふぎの里」の悲哀と愛の童話作家>
- 安城の新美南吉 <安城市教育委員会>
- デデムシ新美南吉詩歌集 <春風社>
- 安城下宿80周年特別展「日本丁林と南吉の暮らし」 <新美南吉記念館>
- 校定新美南吉全集(第八巻)
- 片岡先生に贈呈いただいた資料(南吉のうた他)
- 台地を拓く都築弥厚の夢 <安城市歴史博物館>

安城下宿80周年 の記念として 南吉の思い出

又山小学校六年若潮 実莉

1 研究のきっかけ

3月5日に南吉先生が下宿したという伝説が、又山小学校の歴史の中で大きな役割を果たしている。この伝説を調べてみることにした。南吉先生は、安城下宿80周年を記念して、又山小学校で「南吉先生の思い出」をテーマとした研究発表会が行われた。私は、この発表会に参加し、南吉先生の思い出について研究することになった。

2 準備方法

南吉先生の思い出について、又山小学校の歴史を調べ、南吉先生の生い立ちや、安城下宿の経緯について調べた。また、南吉先生の遺言や、南吉先生の思い出について調べた。

3 折衷南吉記念館を訪ねて

折衷南吉記念館を訪ねて、南吉先生の思い出について調べた。南吉先生の思い出について、又山小学校の歴史を調べ、南吉先生の生い立ちや、安城下宿の経緯について調べた。また、南吉先生の遺言や、南吉先生の思い出について調べた。

4 疑問について質問する

南吉先生の思い出について、又山小学校の歴史を調べ、南吉先生の生い立ちや、安城下宿の経緯について調べた。また、南吉先生の遺言や、南吉先生の思い出について調べた。

5 終わりに

南吉先生の思い出について、又山小学校の歴史を調べ、南吉先生の生い立ちや、安城下宿の経緯について調べた。また、南吉先生の遺言や、南吉先生の思い出について調べた。

南吉先生の思い出について、又山小学校の歴史を調べ、南吉先生の生い立ちや、安城下宿の経緯について調べた。また、南吉先生の遺言や、南吉先生の思い出について調べた。

南吉先生の思い出について、又山小学校の歴史を調べ、南吉先生の生い立ちや、安城下宿の経緯について調べた。また、南吉先生の遺言や、南吉先生の思い出について調べた。

南吉先生の思い出について、又山小学校の歴史を調べ、南吉先生の生い立ちや、安城下宿の経緯について調べた。また、南吉先生の遺言や、南吉先生の思い出について調べた。

南吉先生の思い出について、又山小学校の歴史を調べ、南吉先生の生い立ちや、安城下宿の経緯について調べた。また、南吉先生の遺言や、南吉先生の思い出について調べた。

南吉先生の思い出について、又山小学校の歴史を調べ、南吉先生の生い立ちや、安城下宿の経緯について調べた。また、南吉先生の遺言や、南吉先生の思い出について調べた。

南吉先生の思い出について、又山小学校の歴史を調べ、南吉先生の生い立ちや、安城下宿の経緯について調べた。また、南吉先生の遺言や、南吉先生の思い出について調べた。

南吉先生の思い出について、又山小学校の歴史を調べ、南吉先生の生い立ちや、安城下宿の経緯について調べた。また、南吉先生の遺言や、南吉先生の思い出について調べた。

南吉先生の思い出について、又山小学校の歴史を調べ、南吉先生の生い立ちや、安城下宿の経緯について調べた。また、南吉先生の遺言や、南吉先生の思い出について調べた。

南吉先生の思い出について、又山小学校の歴史を調べ、南吉先生の生い立ちや、安城下宿の経緯について調べた。また、南吉先生の遺言や、南吉先生の思い出について調べた。

南吉先生の思い出について、又山小学校の歴史を調べ、南吉先生の生い立ちや、安城下宿の経緯について調べた。また、南吉先生の遺言や、南吉先生の思い出について調べた。

南吉先生の思い出について、又山小学校の歴史を調べ、南吉先生の生い立ちや、安城下宿の経緯について調べた。また、南吉先生の遺言や、南吉先生の思い出について調べた。

南吉先生の思い出について、又山小学校の歴史を調べ、南吉先生の生い立ちや、安城下宿の経緯について調べた。また、南吉先生の遺言や、南吉先生の思い出について調べた。

南吉先生の思い出について、又山小学校の歴史を調べ、南吉先生の生い立ちや、安城下宿の経緯について調べた。また、南吉先生の遺言や、南吉先生の思い出について調べた。

歴史大賞